論　文　ニダバ（*Nidaba*）38(2009)，59-67

『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』の「課題指向対話」に見られる「文末表現」

―「意味論的機能」，「語用論的機能」，「ポライトネス機能」をめぐって―

呉　　秦　芳

1. はじめに

OPI(Oral Proficiency Interview)[1]の基準によると、上級と認定されるのに必要な「文法」は、「談話文法を使って統括された段落が作れる」レベルとなっている。つまり「自己発話力」を身につけていることを要求される。その条件としては、まず「フィラー」と「接続表現」を上手に使いこなすことが必要とされるが、それだけではなく、様々な「文末表現」をうまく使いこなし、言い表したい内容をより正確に表現できることも上級には重要である。

本研究は日本語の大規模な自発音声データベースである国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」（英名はCorpus of Spontaneous Japanese；これを省略してCSJと呼ぶ）を利用し、その中の「課題指向対話」を選び分析した。また、文字化した対話の録音資料から、文末表現の事例を収集し、形式と機能の点から「文末表現」の「意味論的機能」、「語用論的機能」の文法機能と、対人関係的修辞における丁寧さの「ポライトネス機能」を明らかにして、コミュニケーションにおけるストラテジーを探り、その使用に潜む話し手の心理について検証した。

本研究の結果を実際の会話教育に応用すれば、教育効果の向上を図るとともに、日本語教育者に携わる者にとって、重要な参考指標を提供することができるのではないかと思われる。

2. 先行研究

文末表現における機能については多数の先行研究があるが、文末形式に関する研究がその大半を占める。談話レベルでの機能の研究―まとまった形で扱ったものとしては、佐藤（1993）、小林（1995）、片桐（1995）などが挙げられる。しかし、意味論的・語用論的・ポライトネス機能の視点からする、つまり、三者を総合的に捉えようとしたもの、CSJにおける日本人母語話者の文末形式に関する論述はほとんど見当たらない。

3. 理論の枠組み

3. 1 文法的機能に関する理論

文末表現は言語の文法的機能、つまり、意味論的機能と語用論的機能に密接に関連しているが、本研究では鈴木（2000）に従い、上記の二語を次のように定義する。

意味論的機能：発話の命題内容に直接かかわる、話の言語内での働き。
語用論的機能：発話者の意図、発話者と発話内容の関わり方など、言語外の要素を反映し、メタメッセージを伝える語の働き。

3.2 ポライトネス理論

ここで言う「ポライトネス」とは、日本語の敬語や丁寧表現のように、話し手と聞き手との関係によって、語形に変化が見られるような言語現象のことだけではなく、円満な人間関係を維持するための言語行動上のストラテジーも指す。

Brown & Levinson (1978(以下、B&L)の理論では、人間には自分の希望や個性を他者に是認してほしい、仲間として見なされたいという欲求と、自分の行動を妨げられたくない、自己の行動の自由を他者に束縛されたくないという欲求があるとされている。B&L はこのような考え方に、フェイス（中国語の「面子」）という概念を当てはめ、前者を「ポジティブ・フェイス (positive face)」(以下、P・F とする) 後者を「ネガティブ・フェイス (negative face)」(以下、N・F とする) として定めた。FTA の度合いに応じて、図 1 のようにストラテジーが選択されるとしている。そして、これらの面子を傷つける恐れのある行動を"face—threatening acts" (面子威嚇行動、FTA) と呼ぶ。

B&L の「ポライトネス理論」では、配慮の対象が聞き手のフェイスに限定されており、話し手自身のフェイスに対する配慮については言及されていない。本研究では、小山 (1998) に従い、従来のポライトネス理論を、聞き手のフェイスへの配慮だけではなく、話し手自身のフェイスへの配慮にも広げていく。

小　FTA を行う

明示的に (on record)

(1) 緩和策を講じない
(bald on record)

緩和策を講じる

(2) ポジティブ・ポライトネス

(3) ネガティブ・ポライトネス

(4) 非明示的に (off record)

(5) FTA を行わない

大

(B&L 1987:60 を基に筆者作成)

(図 1) FTA の度合い (フェイスを失う/失わせる危険度の評価)

上記 (1) ~(5) のストラテジーは、更に 10 または 15 の具体的な下位ストラテジーに分類されている。

4. 方法論

(1) 調査方法

本調査で提示した会話例はCSJにおける「課題指向対話（接触場面10会話）」から収集されたものである。角括弧はデータIDを、左端の数字は行番号を、L/Rは話者IDを示す。この文字化した資料の中から「文末表現」をピックアップして、分析、考察を行った。その他、転記の記号は、「改定版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」（宇佐美2007）に準拠する。

(2) 調査対象

分析の対象として、『日本語話し言葉コーパス』（英名はCorpus of Spontaneous Japanese；これを省略してCSJと呼ぶ）を使用した。その中の「課題指向対話」を選び分析した。

CSJの課題指向対話の具体的な内容は、実在の芸能人に講演を依頼した場合の謝礼（ギャラ）の額を想像し、その多寡の順に、芸能人9ないし10名をソートするタスク（ギャラ・タスク）を考案した。対話開始時点で各話者に手渡されている人名リストは、わざと一致しないように作成してあるので、謝礼額の推定に先立って（あるいは同時に）、推定対象となる芸能人の完全なリストを作成するための対話も必要とされる。インタビュアは20代と30代の女性各1名である。ここからは、発話の「機能や効果」を押さえながら、談話レベルで分析していく。

「CSJ」から取得したしたインタビュア（これを省略してLと呼ぶ）と応答者（これを省略してRと呼ぶ）のデータは次の（表1）である。

（表1）「CSJ」から取得したデータ詳細[2]

ファイル名	インタビュアー(L) （出身地・年齢）	応答者(R) （出身地・年齢）
D02F0015	埼玉・20代	東京・30代
D02F0018	神奈川・30代	東京・30代
D02F0025	神奈川・30代	神奈川・20代
D02F0031	神奈川・20代	神奈川・30代
D02F0032	神奈川・30代	宮崎・20代
D02M0014	神奈川・30代	神奈川・30代
D02M0028	埼玉・20代	埼玉・20代
D02M0035	神奈川・30代	北海道・20代
D02M0039	神奈川・30代	東京・30代
D02M0051	神奈川・30代	神奈川・20代

5. データ分析

分析の際には、小林（1995）の分類を基に、筆者の修正を加えて、本調査で集めたデータから文末表現に現れた形式を次に示す六つに分け、分類してみた。今回のデータに現れた文末の形式を分類整

理してみると、(1)「平叙・言い切り」、(2)「平叙・終助詞その他付加」、(3)接続助詞の「言いさし」、(4)「フィラー・あいづち・笑い」、(5)「疑問」、(6)「その他（不明・挨拶語）」がある。ここでは実際に収集した会話データの中から特徴的なものを、使用例をいくつか取り上げて、分析していく。

Ⅰ(1)「平叙・言い切り」

日本語の発話においては、文末に終助詞や接続助詞「が」「けど」などが多く用いられ、それらを伴わない用言の終止形や体言＋ダの形（以下、裸の形と呼ぶ）はあまり用いられないと言われている（水谷1985、メイナード1993など）。そこで本研究では、裸の形を丁寧体・普通体ともに取り上げ、分析の対象とした。

（例1）「丁寧体」の使用文例（D02F0018のデータより）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
125	118	*	R	あのね、うーん、内緒ですよ。
126	119	*	L	ええ。
127	120	*	R	整形してるんじゃないかな？[↑]
128	121	*	L	あ、そうなんだ。
129	122	*	R	それはあたしの予想です。
130	123	*	L	〈笑〉
131	124	*	R	それは予想ですよ。

（例1の129行目）において、122Rの発話は「それはあたしの予想です」に示されたように、デス・マス体（丁寧体発話）を使用し、徐々に「よ」を付加していく交渉過程が見られる。これは意味論的機能から考えると、発話に断定の気持ちが込められ、121Lに対しての「初対面の人とは丁寧に話すように気をつける」という意識の表れである。語用論的機能からは、「普通体では、話し手は聞き手との心理的な距離を近づけ親しさを表そうとし、逆に、聞き手との心理的な距離を遠くして、礼儀をわきまえようとする（益岡1991:105）」と説明されている。

また、「丁寧体」と「普通体」、両方とも「平叙・言い切り」の文で、自分の意見を明示的に表すので、B&Lの枠組みで言えば、緩和策を講じないというストラテジーに該当するものである。

Ⅱ(2)「平叙・終助詞その他付加」

調査結果からも窺われるように、他の終助詞と比べると、「ね」は最も頻繁に用いられる形式である。

（例2）（D02M0024のデータより）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
6	6-1	/	L	<一二三四五>{>},,
7	7	*	R	はい。
8	6-2	*	L	六七八九十人。
9	8	*	R	一二三四五六七八九十人いますね。
10	9	*	L	あ、じゃ、ぴったりですね。
11	10	*	R	はい、そうですね。はい。

意味論的観点から考察すると、（例2の9行目）の8R「一二三四五六七八九十人いますね」は、発話者の認識を聞き手に示すことによって聞き手に確認を求める用法である。次に、10行目の9Lで「あ、じゃ、ぴったりですね。」の「ね」を使っているが、ここでは文が表す内容を内心で確認しながら、話し手の認識として聞き手に評価を示すものである。また、11行目の10Rは9Lが提示した意見に対して、「はい、そうですね」とLに共感して得た自分の判断を示し、Lの知識のあり方に対する配慮がなされるので、応答文にも「ね」を付加しなくてはならない。

語用論的観点から検討してみると、「ね」はもともと、文の末尾について、文の表す命題に対する話し手の判断・同意・感嘆や、話し手が聞き手に対して行う伝達・確認などのモダリティ情報を担うものであることがわかる。つまり「ね」の現れが、評価を共同で受容し、相手の同意を求めるサインになっているのである。このように、「ポライトネス」の観点から考えると、終助詞「ね」の使用は「聞き手のネガティブ・フェイス（negative face）」を重視し、聞き手の同意を求めるという過程をとることで、話し手の認識領域に聞き手を引き入れようとするものであると言えよう。

Ⅲ(3)接続助詞の「言いさし」

筆者はデータに顕著に見られる「言いさし」という発話行為に注目し、これを「話し手にとって伝達すべき内容が明白であるにもかかわらず話し手自身によって文が中断されていて、しかもその後に来るべき内容の文言が会話の中の他の部分に見られず、その場の状況から自明でもない場合」（佐藤1993）と定義づけた。その上で「し」、「て」、「から」、「けど」など発話を中断させて後を言わない言い方を取り上げ、CSJの「課題指向対話」の分析を通じてその主たる機能について考察した。「言いさし」の中で、最も頻度が高く、最も顕著なものは「けど」である。以下は「けど」を取り上げ、考察してみる。

（例3）（D02M0051のデータより）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
89	85	*	L	川合俊一、/少し間/分かりますか？。[↑]
90	86	*	L	バレー、昔バレー選手だった、います？？[↑]
91	87	*	R	うーん？（Dす）スポーツマンぽい人はいますけど
92	88	*	L	んー。
93	89	*	R	この人かな？？[↑]
94	90	*	L	/少し間/んー、？んー、？ん、難しい。

87Rは（例3の91行目）のような「うーん？（Dす）スポーツマンぽい人はいますけど」を発話した後、「この人かな？？[↑]」を付け加えた。「けど」は意味論的観点から述べると、その添加によって、話し手が自分自身の意向を明確に述べることをためらう傾向を示す。また、語用論的視点から解釈してみると、相手への配慮を示すものとして丁寧に聞こえる。とりわけ、「補足」の機能を持ち、それは聞き手に正しく理解してもらうために付け加えた形の補足と言える。

人と人との対談において、あらゆる発話がFTAになり得るため、話者は常に何らかのポライトネス・ストラテジーを選んでフェイスの保持に努めている、とするならば、（87R）の発話のように、「けど」を加えることで語調がやわらかくなり、聞き手に対する「面子」を重視した発話が見られる。金井(1996)でもポライトネス理論の観点から発話末の「けど」の類には聞き手のN・Fを守ろうとする配慮を示す機能があると述べている。

Ⅳ(5)「疑問」

具体的にどのような疑問表現が、CSJの課題指向対話で多用されていたかを見ると、実在の芸能人に講演を依頼した場合の謝礼（ギャラ）の額を想像し、その多寡の順に、芸能人9ないし10名をソートするタスク（ギャラ・タスク）を考案したので、（例4）が示すように、「たっけ」の使用がしばしば見られる。

（例4）（D02M0039のデータより）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
55	48-2	*	R	水野晴郎ですよね。
56	50	*	L	はい。
57	51	*	R	/少し間/でこの右っ側はどなたでしたっけ？。[↑]
58	52-1	/	L	山川,,
59	53	*	R	（Dアナウ）<アナウンサーでしたっけ>{<}？。[↑]
60	52-2	*	L	<アナウンサーですね>{>}元アナウンサーっつったらいいのかしら。

意味論的視点から考えると、51Rと53Rが、57行目と58行目で使用した「たっけ」は確認の問いか

けの意を表している。語用論的機能から検討してみると、直接相手に情報を求める形式だと考えられる。さらに、「たっけ」は聞き手のN・Fに配慮しているので、相手のネガティブ・ポライトネスのストラテジー2「質問、聞き返し」に当てはまると思われる。

V(4)「フィラー・あいづち・笑い」 (6)「その他（不明・挨拶語）」

「フィラー・笑い」に比べ、「あいづち」の頻度の方が高く、参加者が対談によって他者の発話を聞き理解しているという表示を行い、談話を進行している様子が見受けられる。

このデータに見られた「その他」とは、ほとんどが早口であったり、録音状態が悪く、聞き取り不能であったものである。また、「ありがとうございました」、「お願いします」などの挨拶表現も含まれる。

6. まとめと課題

今回のデータで現れた文末の様相を意味論的機能、語用論的機能、ポライトネス機能からまとめると、（表2）のようになる。

（表2）

機能	「平叙・言い切り」	「平叙・終助詞その他付加」（ね）	接続助詞の「言いさし」（けど）	「疑問」（たっけ）
意味論的機能	断定の気持ち	発話者の認識を聞き手に示すことによって聞き手に確認・評価を求める	話し手が自分自身の意向を明確に述べることをためらう	確認の問いかけ
語用論的機能	普通体：親しさを表す 丁寧体：礼儀をわきまえる	評価を共同で受容し、相手の同意を求めるサイン	相手への配慮を示す	直接相手に情報を求める
ポライトネス機能	緩和策を講じない	聞き手のN・Fネガティブ・フェイスを重視する	聞き手のN・Fを守ろうとする配慮を示す	相手のネガティブ・ポライトネスのストラテジー2「質問、聞き返し」

以上本稿では、意味論、語用論、ポライトネスの三つの観点から「文末表現」の機能を分析し、日本人母語話者の会話管理がどのように行われているのかを探った。しかしながら、本研究はまだ非常に小規模な探究的段階にあり、分析レベルも本データで観察された現象にとどまっている。さらに高次の談話調節機能レベルの分析に着手してゆくことは、今後の課題の一つである。また、性別と、上記三つの機能との関連についても、今後、更なる考察の深化を図り、研究を充実させていく必要がある。

付記

本稿は『2008年台灣日語教育研究與實踐的現況暨展望國際學術研討會』（銘傳大學会場）（2008年

12月）の内容に加筆し、修正を加えたものである。

本研究は、96年度行政院国家科学委員会研究費による新進人員専題研究「由『日語談話資料庫（CSJ）』中的『課題指向對話』來剖析日本人母語話者的會話管理」（計画番号NSC96-2411-H-364-002 、研究代表者：呉秦芳）の研究成果の一部である。

注

1) ACTFL（全米外国語教育協会）はOPI(Oral Proficiency Interview)評価基準の中で「被験者が作りだす発話の量的、構成的側面」をテクストの型と呼び、「単語句」、「単文」、「段落」、「複段落」という四つのレベルに分け、それぞれを順に初級、中級、上級、超級の主な特徴の一つとしている。

2) 3インタビュアー(L)と応答者（R）のペアについて、ファイル名のFは女性と女性を指すが、ファイルD02F0015名のMは女性と男性を表す。年齢、性別、出身地の変数を配慮しているので、CSJに含まれる対話データからD02F0015、D02F0018、D02F0025、D02F0031、D02F0032、D02M0014、D02M0028、D02M0035、D02M0039、D02M0051の10対話を標本として選び、小規模コーパスを作成した。従ってこれは、無作為抽出ではない。

参考文献

宇佐美まゆみ(2007)「改定版：基本的な文字化の原則」(Basic Transcripyion System for Japanese e:BTSJ)

呉秦芳(2008.10)「ポライトネスの観点から見る日本語母語話者の『文末表現』の男女差―『日本語話し言葉コーパス（CSJ)』の「対談」場面分析を通して―」『銘伝日本語教育第11期』p.19～p.43

大塚容子（2000)「テレビ討論における文末表現―ポライトネス」の観点から―」『岐阜聖徳学園大学紀要』教育学部

片桐恭弘（1995)「終助詞による対話調節」『月刊言語』24-11大修館

金井典子（1996)「含意の『が』とその慣用化―ポライトネスの観点から―」『雲雀野』18豊橋技術科学大学

小林美恵子（1995)「文末形式に見る女子高校生の会話管理」『ことば』16号現代日本語研究会

小山哲春（1998)「ポライトネスのストラテジーとしての日本語文末表現」『第二回社会言語科学研究大会予稿集』pp.5-10

益岡隆志（1991)『モダリティの文法』くろしお出版

メイナード・K・泉子（1993)『会話分析』くろしお出版

水谷信子(1985)『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版

日本語記述文法研究会（2003)『現代日本語文法4　第8部　モダリティ』くろしお出版

佐藤勢紀子（1993)「言いさし、、『が/けど』の機能―ビデオ教材の分析を通じて―」『東北大学留学生センター紀要』第1号

鈴木佳奈 2000 「会話における『なんか』の機能に関する一考察に関する一考察」『大阪大学言語文化学』Vol.9

Brown, Penelope eand Levinson, Stephen. (1987(1978))Poloteness:Some Universals in Language Usage(reissued) CambridgeUniversity Press

CSJ 関連URL:

http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.html